



Title	「孝」思想の研究
Author(s)	佐野, 大介
Citation	大阪大学, 2005, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/45697
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed 大阪大学の博士論文について

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	佐野大介
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第19120号
学位授与年月日	平成17年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化形態論専攻
学位論文名	「孝」思想の研究
論文審査委員	(主査) 教授湯浅邦弘 (副査) 教授高橋文治 講師辛賢

論文内容の要旨

「孝」は中国思想史を貫く最も重要なキーワードの一つである。中国の家族・国家・政治・宗教などの問題は、この「孝」を抜きにしては語れない。

本論文は、哲学研究の立場から、中国古代および日本江戸期における「孝」の思想について検討したものである。全体は、第一部「『孝経』注釈に関する研究」、第二部「『孝』と「不孝」との間」、第三部「懐徳堂の孝」の三部から成り、さらに附録として、懐徳堂の孝関連文献の翻刻など、資料整理の成果が加えられている。

まず第一部では、『孝経』に関する主要な注釈を、「自覚的孝解釈」に関する資料として検討するものである。特に、『古文孝経孔安国伝』に注目し、その偽書説を整理・検討して、概ね六朝期の成立であるとの仮説を提示した上で、思想的な特質としてその「法治」的性格を指摘する。また北宋・司馬光の『古文孝経指解』を取り上げ、「平天下」へ至る重要なプロセスとしての「治家」に特徴があること、『孝経』の撰者をめぐる議論に新たな主張を加えたこと、古文『孝経』復興の端緒となったこと、などを明らかにする。

第二部は、『孝経』注釈以外の「孝」に関する言説を「無自覚的孝解釈」と位置づけて、諸文献における孝関係資料を検討する。ここでは、「孝」の理論構造の分析とともに、何が「不孝」「非孝」であるかの考察が必要であるとして、「孝」を構成するとされる「愛」と「敬」との関係について検討した後、「孝」と「不服従」、「孝」と「不孝」という対立項を設定して、「孝」の検討を進める。加えて、儒家と墨家における「孝」のあり方を比較する。

「孝」の思想の日本的展開を考察するのが第三部である。ここでは、江戸期の大坂学問所として隆盛を誇った懐徳堂に注目し、特に懐徳堂で最大の経学研究の成果を残した中井履軒の「孝」観念を検討し、それが「孝」の結果を念頭に置かない、極めて動機主義的な性格を持つことを明らかにし、またそうした性格が兄・竹山にも見られることなどを指摘する。

論文審査の結果の要旨

本論文は、申請者がこれまで発表してきた八本の論考を基に、さらに書き下ろし三本を加え、計三部八章に再編したものである。多くの既発表論文を基にしているため、各論考の完成度は高く、重厚な内容に仕上がっている。特に、

これまで成立事情が不明とされてきた『古文孝經孔安国伝』について、種々の偽書説を丹念に検討し、その成立を六朝期と推測した上で、その思想的特質として「法治」的傾向のあることを明らかにした点は、従来の研究史に大きな足跡を残すものであると評価できる。また第二部における「孝」の構造解析は精緻を極めており、今後の関連研究に重要な指標を提供することになる。懐徳堂の「孝」についての研究も、まとめたものとしては本邦初の重要な成果である。

ただ、本論文では、各章の完成度は高いものの、部ごとの連続がそれほど緊密ではなく、論文全体としての体系性、一貫性という点において、なお不十分な印象が残る。また、『孝經』注釈史を検討しながら、専論しているのが『古文孝經孔安国伝』と『古文孝經指解』のみである点も、今後の大きな課題であろう。

とは言え、本論文は、古代中国における「孝」の思想について、文献学的、哲学的に考究した重要な成果であり、また懐徳堂学派の「孝」の研究についても大きな展望を切り開くものである。よって、本論文を博士（文学）の学位に値するものと認定する。